

『万葉集』の恋の歌をよむ

群馬県立女子大学 北川 和 秀

A. 一途な思い

- ① 夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものそ
（八・一五〇〇）大伴坂上郎女
- ② 信濃なる筑摩の川の細石も君し踏みてば玉と拾はむ
（二四・三四〇〇）東歌（信濃）
- ③ 君に恋ひ甚も術なみ奈良山の小松が下に立ち嘆くかも（四・五九三）笠女郎
- ④ 梅の花降り覆ふ雪を包み持ち君に見せむと取れば消につつ
（一〇・一八三三）作者不明
- ⑤ 磯城島の日本の国に人二人ありとし思はば何か嘆かむ
（一三・三二四九）作者不明

B. 女性の名前

- ① 籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岳に 菜摘ます児 家告らせ
名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れ しきなべ
て われこそ居れ われにこそは 告らめ 家をも名をも（一・一）雄略天皇
- ② 難波潟潮干に出でて玉藻刈る海未通女ども汝が名告らさね
（九・一七二六）丹比真人
- ③ 漁する人とをよませ草枕旅行く人にわが名は告らじ（九・一七二七）海未通女
- ④ 隼人の名に負ふ夜声いちしろくわが名は告りつ妻と持ませ
（一一・二四九七）柿本人麻呂歌集

C. 母

- ⑤ 隠沼の下ゆ恋ふれば為方を無み妹が名告りつ忌むべきものを
（一一・二四四一）柿本人麻呂歌集
- ① たらちねの母に知らえずわが持てる心はよし忍君がまにまに
（一一・二五三七）作者不明
- ② 汝が母に嘖られ吾は行く青雲のいで来吾妹子逢ひ見て行かむ
（一四・三五一九）東歌（未勘国）
- ③ たらちねの母に障らばいたづらに汝もわれも事成るべしや
（一一・二五一七）作者不明
- ④ たらちねの母に申さな君もわれも逢ふとは無しに年そ経ぬべき
（一一・二五五七）作者不明
- ⑤ かくのみし恋ひば死ぬべみたらちねの母にも告げつ止まず通はせ
（一一・二五七〇）作者不明

D. 人の目・人の噂

- ① 暫くも見ねば恋しき吾妹子を日に日に来れば言の繁けく
（一一・二三九七）柿本人麻呂歌集
- ② 心には燃えて思へどうつせみの人目を繁み妹に逢はぬかも
（一一・二九三二）作者不明
- ③ 嘆きせば人知りぬべみ山川の激つ心を塞きあへてあるかも
（七・一三八三）作者不明
- ④ うつせみの人目繁けばぬばたまの夜の夢にを継ぎて見えこそ
（一一・三一〇八）作者不明
- ⑤ あしひきの山より出づる月待つと人には言ひて妹待つわれを
（一一・三〇〇二）作者不明

E. 通う男の気持ち

- ① 足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継橋やまず通はむ
（二四・三三八七）東歌（下総）
- ② 妹が門行き過ぎかねつひさかたの雨も降らぬか其を因にせむ
（一一・二六八五）作者不明
- ③ 思はぬに到らば妹が嬉しきと笑まむ眉引き思ほゆるかも
（一一・二五四六）作者不明

F. なかなか逢えない

- ① み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へど直に逢はぬかも（四・四九六）柿本人麻呂
- ② 恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽してよ長くと思はば
（四・六六一）大伴坂上郎女
- ③ 如何ならむ名を負ふ神に手向けせばわが思ふ妹を夢にだに見む
（一一・二四一八）柿本人麻呂歌集

G. 来ない男

- ① 春雨に衣はいたく通らぬや七日し降らば七日来じとや（一〇・一九一七）作者不明
- ② 陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを（三・三九六）笠女郎
- ③ 相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額つくごとし（四・六〇八）笠女郎
- ④ 相思はず君はあるらしぬばたまの夢にも見えず祈誓ひて寝れど
（一一・二五八九）作者不明
- ⑤ 来むと言ふも来ぬ時あるを来じと言ふを来むとは待たじ来じと言ふものを
（四・五二七）大伴坂上郎女

H. 誇張した表現

- ① 君が目を見まく欲りしてこの二夜千歳の如く吾は恋ふるかも
（一一・二三八一）柿本人麻呂歌集
- ② 八百日行く浜の沙もわが恋にあに益らじか沖つ島守（四・五九六）笠女郎
- ③ 一重のみ妹が結ばむ帯をすら三重結ぶべくわが身はなりぬ（四・七四二）大伴家持
- ④ 朝影にわが身はなりぬ玉かぎるほのかに見えて去にし子ゆゑに
（一一・二三九四）柿本人麻呂歌集
- ⑤ 外にみて恋ひつつあらずは君が家の池に住むとふ鴨にあらましを
（四・七二六）大伴坂上郎女
- ⑥ かくばかり恋ひつつあらずは朝に日に妹が履むらむ地にあらましを
（一一・二六九三）作者不明

I. 人妻

- ① 験なき恋をもするか夕されば人の手まきて寝らむ児ゆゑに
（一一・二五九九）作者不明
- ② 神樹にも手は触るとふをうったへに人妻と言へば触れぬものかも
（四・五一七）大伴安麻呂
- ③ 人妻と何か其をいはむ然らばか隣の衣を借りて着なほも
（一四・三四七二）東歌（未勘国）

J. 旅の別れ

- ① 梳も見じ屋中も掃かじ草枕旅行く君を齋ふと思ひて（一九・四二六三）作者不明
- ② わが旅は久しくあらしこの吾が着る妹が衣の垢づく見れば
（二五・三六六七）遣新羅使人
- ③ 君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ
（一五・三五八〇）遣新羅使人の妻

④ 草枕旅行く君を人目多み袖振らずしてあまた悔しも（二二・三二八四）作者不明

⑤ 蘆垣の隈処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしそ思はゆ

（二〇・四三五七）刑部千国／上総防人

⑥ わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず

（二〇・四三三二）若倭部身麻呂／遠江防人

⑦ 吾等旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦すらむわが妻かなしも

（二〇・四三三三）玉作部広目／駿河防人

⑧ 色深く背なが衣は染めましを御坂たばらばま清かに見む

（二〇・四四二四）物部刀自売／武蔵防人妻

⑨ 防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しき物思もせず

（二〇・四四二五）防人妻（昔年）

⑩ 君が行く道のながてを繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがも

（二五・三七二四）狭野弟上娘子

⑪ 畏みと告らずありしをみ越路の手向に立ちて妹が名告りつ

（一五・三七三〇）中臣宅守

⑫ 帰りける人來れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて

（二五・三七七二）狭野弟上娘子

⑬ わが背子が帰り來まさむ時の為命残さむ忘れたまふな

（二五・三七七四）狭野弟上娘子

K・死別

① 降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに（二・二〇三）穂積皇子

② 吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき

（三・四四六）大伴旅人

③ 福のいかなる人か黒髪あはの白くなるまで妹が声を聞く（七・一四一一）作者不明

④ 我が背子を何処行かめとさき竹の背向そがひに寝しく今し悔しも

（七・一四一二）作者不明

L・夫婦愛

① つぎねふ 山背道やましろちを 他夫ひとづまの 馬より行くに 己夫おのづまし 歩かちより行けば 見るこ

とに 哭なのみし泣かゆ 其思そのふに 心し痛し たらちねの 母が形見と わが 持てる 真澄鏡まそみがみに 蜻蛉領巾あきづの 負おひ並なめ持ちて 馬買まかひへわが背

（一三・三三三四）作者不明

② 真澄鏡まそみがみ持てれどわれは 駈しるしなし君が歩かち行よりなづみ行く見れば

（一三・三三一六）作者不明

③ 馬買まかひはば妹歩かち行ならむよし急やし石は履ふむとも吾は二人行かむ

（一三・三三一七）作者不明

④ わが里に大雪降り大原の古りにし里に落ふらまくは後のち（二・一〇三）天武天皇

⑤ わが岡の霰おかみに言ひて落ふらしめし雪の摧くだけし其処そこに散りけむ

（二・一〇四）藤原五百重娘

⑥ わが背子と二人見ませば幾許いくばくかこの降る雪の嬉たのしからまし

（八・一六五八）光明皇后

⑦ 君がため手力たちから疲れ織りたる衣ぞ 春さらばいかなる色に摺すりてば好けむ

（七・一二八一）柿本人麻呂歌集

⑧ 紅くれなゐは移ろふものそ 椽つるばみの馴なれにし衣きぬになほ若かめやも

（一八・四一〇九）大伴家持